

キズ(Citrus kizu hort.ex Y. Tanaka)の発生年代に手掛かりを与える古記録について

誌名	佐賀県果樹試験場研究報告
ISSN	03852822
著者名	貞松,光男
発行元	佐賀県果樹試験場
巻/号	13号
巻号補足	
掲載ページ	p. 5-7
発行年月	1996年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター

Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



キズ (*Citrus kizu* hort. ex Y. TANAKA) の 発生年代に手掛かりを与える古記録について

貞 松 光 男

キーワード: キズ, キノス, *Citrus kizu* hort. ex Y. TANAKA, 発祥

An Ancient Document Assessing the Originated Age of Kizu, *Citrus kizu* hort. ex Y. TANAKA

Mitsuo SADAMATSU

ABSTRACT

Kizu or Kinosu (*Citrus kizu* hort. ex Y. TANAKA) is a one of acid citrus mainly produced in Saga and Fukuoka Prefecture. This species recorded at first on Yamato Honzou written by Atsunobu Kaibara by the name of Riman in 1708. I found the ancient document written on Kizu at 1220 that has been preserved in Jissouin temple cited at Kawakami, Yamato-cho, Saga Prefecture. It confirms the origin of Kizu can go back to 1200 years at least.

key words : Kizu, Kinosu, *Citrus kizu* hort. ex Y. TANAKA, origin.

キズ (*Citrus kizu* hort. ex Y. TANAKA) は佐賀、福岡両県を中心に分布する香酸カンキツの一種⁹⁾で、佐賀県では一般にキノスと呼称されている。カボス、スダチとともにキズは三大香酸カンキツの一つとされている¹²⁾が、現在、カボス、スダチが経済栽培されているのに対し、キズは農家の庭先に点在するにすぎない。

キズはスダチ、ハナユなどとともにユズの近縁雑種^{7,9)}、ないし偶発実生⁸⁾と考えられている。ユズは中国揚子江上流の原産とされ⁶⁾、日本には古く渡来したことが続日本書紀 (797編) に元正天皇養老1年 (717)、隕石の「大さき柚子の如し」とあることからうかがわれる。

一方、キズに関する記録は、貝原篤信 (益軒) の大和本草 (1708) に「リマント云物アリ 柑ノ類ナリ味不好只切テ酒ノ肴トス大サハ柑ノ如 味酸シ」¹⁾とあるを初出とする。リマンはレモンの転音と考えられるが、リマンをキズにあてる根拠として、神田玄泉の本草或問 (1738) に「^開橙^臺 枳名木乃醋和名利満矣番語 此果肥前州多有之其民以代米醋食味香美故之矣馬志曰橙樹似橘而葉大其形円大於橘而香皮厚而皺八月熟……」とあること、さらに、小野蘭山の大和本草批正 (1780) に「リマン、筑前にて今又きずとも云へり、漢種なるよしなり、淡路にもあり近年江戸にもあり、大さみかんの如にして酸し、筑前にて醋に代用ゆ、南方草本状に宣母子と云ものに充る、阿州方言すだちと云」とあることによる²⁾。すなわち、木乃醋=キノス=キズ=リマンということになる。

リマンをキズないしスダチの異称とするのは問題がないわけではないが、ここでは省略する。少なくとも、1730年代にはキノスなる香酸カンキツが肥前に存在したことは明らかである。したがって、キズの発生は約300年前に遡ることがわかったが、それ以上、どの時代まで遡ることができるのか不明であった。この度、キ

ズが鎌倉時代には存在したことを示す古記録を発見したので報告する。

この古記録は、佐賀郡大和町川上にある真言宗御室派の古刹、実相院の文書中にある。

すなわち、図に示すように

「承久二年^{庚辰}十一月、造花勤行法也

小行事 最過房賢海

三日 酒開也 御酒半吉也 饗膳者美也 妙也 御菜八種
汁四種也、口物六種 圓智房 勤行志致丁寧畢
但、於御酒兼酢 似橘味 時々者半吉酒在之 依夢
現得柚

十三日 色衆饗如常

久間 夢酒酢 云々⁴⁾とある。

これが書かれた承久2年は1220年にあたる。橘や柚にまさる酒の肴(酢)が出たと記されている。

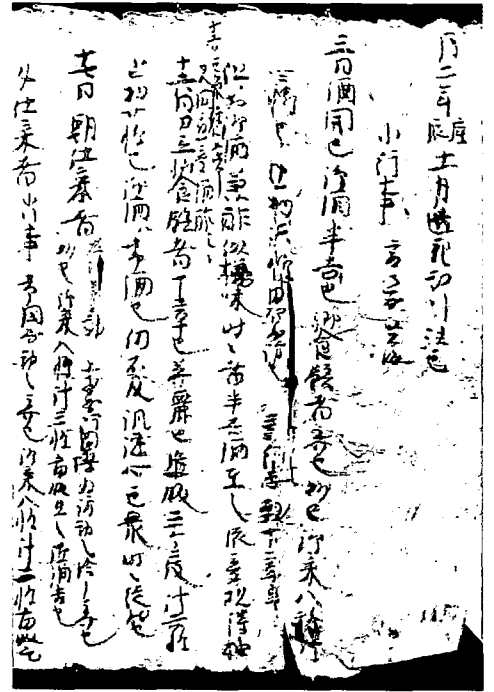
酒の肴としてカンキツを利用した例は、伊勢物語(904頃)、西宮記(982)、無名草子(1200頃)などに記されており、古今著聞集(1254)には、盃酌の終座にあたり、「柚八柑七」といって柚を切り、盃をとる人必ず三度吞むしきたりがあったことを記している¹⁾。同時代、佐賀においても同じ風習がはやっていたことをうかがわせる。

なお、本記録にはカンキツ名は記されていない。それをキズに当てる理由であるが、まず、文意から香酸カンキツの種類であることは疑いない。そこで、実相院の周辺における香酸カンキツの植栽の実態を調査した。その結果、キズの古木の密度が最も高く、他にユズが散在するのみで、それ以外の香酸カンキツ類は見出せなかった(近年導入され、明確な記録のあるカボスを除く)。さらに、調査地区を拡大して県内における香酸カンキツ類の古木を調査したところ、キズ、ユズ以外の種類はなく、かつ、キズは大和町川上地区(旧川上村)で密度が最も高く、その周辺の神埼町、脊振村、富士町、三日月町、小城町に散在し、その他の地区にはほとんど認められなかった³⁾。

以上のように、キズは実相院が所在する川上地区に集中していること、さらに、それ以外の香酸カンキツはユズを除いて見当たらないことから、本文書に記されているカンキツはキズであると断定したい。このことから、キズの発生年代は、少なくとも鎌倉時代(1192~1333)まで、場合によっては平安時代まで遡ることが出来ることがわかった。

ちなみに、実相院は河上神社の神宮寺として712年行基により建立された一院であり、のち肥前国一の宮とされた河上神社の一切の権限を握るまでに勢力をのばした。文化財多数を蔵する⁵⁾。

最後に貴重な古文書の閲読、撮影を快諾された実相院住職 北脇良哲氏に深謝する。



図「造花勤行法日記」(部分)

引用文献

- 1) 貝原篤信(1708) 大和本草
- 2) 黒上泰治(1968) スダチの研究. 第2報. スダチ研究資料集成. 徳島女子大研究紀要. 3:1-106
- 3) 貞松光男(1969) キノスー佐賀特産ミカン。佐賀の植物. 4(1):9-14
- 4) 佐賀県立図書館(1974) 佐賀県史料集成. 236.
- 5) 佐賀新聞社編(1983) 佐賀県大百科事典. 992.

- 6) 田中長三郎 (1928) 柑橘種類学講義. 柑橘研究2(2): 242-256.
- 7) 田中長三郎 (1931) 柑橘種類学講義. 柑橘研究5(1): 89-102
- 8) 田中長三郎 (1949) 柑橘種類大観. 柑橘の研究11: 153-163.
- 9) 田中諭一郎 (1948) 日本柑橘図譜下巻. 養賢堂.
- 10) 和田茂樹 (1956) 日本柑橘の史的研究. 果樹研究. 第1集: 15-73
- 11) 吉田喜一郎 (1963) 埋もれた果実. かほす.